



日本国際飢餓対策機構 (Japan International Food for the Hungry: 略して JIFH) は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年にひとりの日本人がインドシナ難民救援に参加したことを契機として誕生しました。以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人材育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合 (Food for the Hungry International Federation) の一員として、18 ヶ国 55 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

東北大震災対策事務局を開設

当機構は東日本大震災の復興支援活動を円滑に進めていくために、このほど仙台市青葉区の日本キリスト教団東北教区エマオセンター内に「東北大震災対策事務局」を開設しました。

事務局の住所は次の通り。

〒980-0012 仙台市青葉区錦町 1-13-6

エマオ 2E

日本国際飢餓対策機構 東北大震災対策事務局

電話番号 022 (217) 4611

FAX 番号 022 (217) 6651



支援物資倉庫

有限会社 仙台丸周内

〒984-0002

仙台市若林区卸町東 5-2-25

連絡先は、080-3341-8906

開設時間は、日曜日を除き当面、月曜日から土曜日の午前 9 時から夕方 5 時まで。

夏のキャンプのお知らせ

今年の夏のワークキャンプは、中米ボリビアのみで行います。

日程：8 月 18 日～ 31 日まで (予定)

費用：未定

参加の申し込みや問い合わせは愛知事務所まで。

なおオリエンテーショントレーニングは東日本大震災の救援活動に集中させていただくため、中止となりました。

ハンガー・ゼロ・サポーター大募集中！

今すぐ各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

ハンガー・ゼロ自販機でアフリカ支援

のどを潤しながら、飢餓に苦しむアフリカの人々を支援することができます自販機ができました。ドリンク 1 本につき 10 円が支援金になります。3 本分 30 円は、アフリカの人たちの一食分にあたります。



現在、大阪事務所の前とキングスガーデン三重の大台共生園と共生園に、車椅子対応型がそれぞれ 1 台設置されています。

設置にあたり費用負担はありません。ハンガー・ゼロのオリジナルデザインでも費用はゼロ。前面にメッセージを表示できますので、多くの人に世界の飢餓の現状をお伝えすることができます。

ハンガー・ゼロ自販機設置のご相談は、日本国際飢餓対策機構 072-920-2225 まで

- ☐ ハンガー・ゼロ・サポーターとして協力します。
毎月 () 口、協力します。(1 口 1,000 円)
- ☐ JIFH 会員になり毎月定期的に財的協力をします。
毎月 () 口、協力します。(1 口 500 円)
- ☐ 「世界里親会」に協力します。
説明書、里親会入会申込書を送ってください。
- ☐ 海外派遣スタッフを支援します。
毎月 () 円 () スタッフ指定
- ☐ 海外派遣スタッフを支える会の会員になり、協力します。毎月 () 口 (1 口 1,000 円)
- ☐ 郵便自動引落の申込書を送って下さい。

フリガナ 氏名： 男・女

〒 住所：

(電話)

▼申込日： 年 月 日▼

FAX・072-920-2155

ハンガー・ゼロ・サポーターのお申し込み拡大中です。運動への参加を感謝いたします。



日本国際飢餓対策機構

2011 No.251

6

飢餓対策 News



5 月ハンガー・ゼロ・チャリティーコンサートで演奏する 4 本指のピアニストのイ・ヒアさん

「私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手をおおう陰。昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。」

詩篇 121:1~7 (新改訳)

東日本大震災から丸 2 ヶ月が過ぎて、ようやく仮設住宅への入居が始まりましたが、まだまだ多くの方々が不自由な避難所生活を余儀なくされています。そして健康問題やストレスなどの精神的な疲労も重なり、現在も先の見えない不安を抱えておられます。宮城、岩手における支援活動で、被災された方々と出会う中で筆者の心に幾度となく浮かんできた聖書のことが冒頭の聖句です。

エルサレムへの都上りの直前、目の前に広がる山々を見上げて巡礼者はたじろぎます。荒涼としたこの山々には

「死の谷の陰」とも呼ばれる危険な道程があり、その道中では強盗や獣に襲われるかもしれない。心躍る巡礼の旅が、二度と我が家には戻って来られない危険な旅になるかもしれない。目の前にそびえる山々は、巡礼者にとっては重く押し掛かる恐れと不安そのものです。しかし、この山々をも創造されたお方が私と共にいてくださることを知り、そのお方の守りと導きを経験することによって巡礼者は一歩踏み出して行けます。恐れと不安が希望に変わって行く「その時」です。

あの日を境に、目の前には壊された日常生活ががれき

となって広がっています。そのような厳しい現状の中で、私たちのないうることは小さな点のような働きかもしれません。それでも、点と点をつなげて行く地道な継続された救援の働きをさせていただくことを通して、ここにも主がおられること、その主はまどろむことも眠ることもなく必ずや助けて、この悲しみや悲劇を絶望で終わらせる方ではないというメッセージをお届けし続けることが、恐れと不安が希望に変わる「その時」を生み出すと信じています。

国内啓発総主事 田村治郎

★ご協力を感謝します★皆様に飢餓対策ニュースをお届けするために、毎月、ひばり障害者作業所 (八尾市)、生活愛 (大阪市など)、そして関西一円のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さいます。ありがとうございます！

■発行者	岩橋竜介	大阪	〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1 TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155
■発行所	一般財団法人 日本国際飢餓対策機構	東京	〒101-0062 千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 517 号室 TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782
	Web サイトアドレス http://www.jifh.org/ e メールアドレス general@jifh.org	愛知	〒466-0064 名古屋市中区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F TEL (052)731-8111 FAX (052)731-8114
■郵便振替	00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構 ※支援金は随時受け付けております。	広島	〒731-0103 広島市安佐南区緑井 2-21-23 201 号 TEL (082)831-1214 FAX (082)877-3961
		沖縄	〒901-0156 那覇市田原 3-8-1 ユリ香ハウス 201 号 TEL (098)859-4585 FAX (098)859-4540

1 分間に 17 人 (うち 12 人が子ども)・1 日に 2 万 5 千人・1 年間では約 1,000 万人が、飢えのために生命を失っています。

東日本大震災の被災者と西アフリカで飢餓に苦しむ人々を支援する「ハンガー・ゼロチャリティーコンサート大阪」が5月20日大阪市内の大阪女学院で開催され、来会者と会場ボランティアを合わせて800名を超える人々が参加。四本指のピアニストのイ・ヒアさんの演奏、森祐理当機構親善大使らによる歌や被災地活動報告が行われました。当日は席上募金として394,970円の支援が寄せられました。



800名が来会した大阪コンサート会場

被災地仙台から駆けつけた黒須氏と阿部牧師

チャリティーコンサート開催



写真④ジェンベを演奏するアデックさん
写真⑤森親善大使とイ・ヒアさんが競演
写真⑥一人芝居を熱演する照屋京子さん



全国5都市での開催の皮切りとなった大阪コンサートでは、韓国から来日したイ・ヒアさん、当機構親善大使の森祐理さん、一人芝居の照屋京子さん、ジェンベ（太鼓）のアデックさんが出演、それぞれ被災者への思いを込めて感動的な演奏が行われました。

イ・ヒアさんは、本当にそれが4本指で演奏されているとは思えないほど力強くかつ繊細なタッチでショパンやパッヘルベルのクラシックナンバーを中心に演奏を披露、即座に聴衆の心をとらえました。曲の合間には「ピアノを通して神様と人々に喜びを与えることができることが嬉しい」「日本頑張っ！」と苦しみの中にある人々を励まし、心を込めて一曲一曲を演奏されました。

親善大使の森さんは、歌とともにすでに2度にわたり避難所慰問コンサートを行った様子をテレビ報道の映像を交えて報告。支援物資だけでなく心の励ましが再び立

ち上がる大きな力になることを、自身の阪神淡路大震災での被災体験（弟が死亡）を交えて語られ、その言葉に共感し涙する人も多くおられました。

沖縄から参加した一人芝居の照屋京子さんは、エチオピアを訪れた経験をもとに創作された一人芝居で、飢餓に直面した母と子の苦しみや心の葛藤を渾身込めた迫力ある演技で披露され、アフリカの飢餓の厳しい現実の中で、キリスト信仰が大きな希望を与えていることを伝えられました。

コンサートには、宮城県仙台市で当機構とともに被災者支援を続けている若林区の黒須踐治氏（民生委員）と阿部頌栄牧師（仙台富沢キリスト教会）も駆けつけ、「自分たちの力だけでは復興はできませんが、JIFHをはじめ多くの方が私たちを助けてくださって心より感謝します。希望は絶望に終わらないと信じています」（阿部）「もう駄目かなあって何回も

思いました。津波は多くを奪いましたが、みなさんのような方々との素敵な出会いと希望を与えてくれました」（黒須）と語り、東北支援への感謝を述べられました。

チャリティーコンサートは、愛知、広島、沖縄、東京でも開催されました。全コンサートで寄せられた募金の集計は次号でお知らせします。

●来会者の感想

「すごく良かったです。津波の映像は衝撃的でした。ここに来て、復興のためにやっていけるんやと思いました。私も東北でボランティアに行きたいです」（女子大生）「来て良かったです。私たちの中で少し記憶が薄れかけていた被災地のことをもう一度思うことができて行動起こしていくチャレンジが与えられました。被災者の方々の生の声をきけたことも感動しました」（奥田洋平さん結実さんご夫妻）

●ハンガー・ゼロ・サポーターのお申し込みは、専用ウェブサイト <http://www.jifh.org/hungerzero/> からできます

活動地の

ボリビア多民族国

駐在 小西小百合

思い出

1996年からのドミニカでの活動の初期、首都サントドミンゴでミリアムという当時60歳位のクリスチャン未亡人の一人暮らし宅に滞在させてもらいながら、田舎の赴任地へ行く準備をしていました。彼女のご主人は8ヶ月前に心臓発作で亡くなっていました。子どもがいない彼女は当時悲しみに暮れ教会礼拝出席もやめ、殆んど家に引きこもって、ペットのオウムと親戚以外には心を許していないうでした。彼女はスペイン語のみを話し、たいへんな潔癖症かつ神経質で私は最初息が詰まりそうでした。

しかしある週末、国際

飢餓対策機構・米国のスザーンが休暇から戻った際、私が日本食を作って二人に振舞うとミリアムはとても喜び、それが彼女と親しくなるきっかけとなりました。その一週間後、再度スザーンと私が話をしていると彼女がやってきて、亡きご主人との思い出をとうとうと語りだし、みるみるうちに大粒の涙が…。彼女はとても早口なので細かい内容は殆んど理解できま

せんでしたが、その深い悲しみが私には痛いほどよくわかりました。泣きながら話し続ける彼女の手をぎゅっと握り締めて聞いていた私も、涙があふれました。

ともに涙を流し祈った ミリアムさん

ミリアムはスザーンに「彼女は私の言っていることが理解できているの？」と尋ねました。「ミリアム。私にはあなたの気持ちがよくわかります」と私。「サクリはあなたの気持ちがよくわかっていてるわ。彼女もご両親を亡くされたから」と言うスザーンに「でも、全く同じではないわ」とミリアム。私は「そうかもしれない。でも、神様は今もあなたのそばにい



●小西小百合●

1996年から3年間ドミニカ共和国、4年間ペルー共和国での働きを経て、現在ボリビア多民族国のコチャバンバ、チャヤで人づくりコーディネーターとして活動中

て、あなたの悲しみを誰よりも理解して下さっているわ」とつたないスペイン語で言いました。

翌日の日曜日彼女と教会に行った時、彼女は涙を流し声を出して何度も神様に祈っていました。

私は彼女の肩を抱きし

めながら、彼女の心が慰められるように祈りました。彼女はその後続けて礼拝に出席し、私たちは毎晩一緒に聖書を読み祈る時を持ちました。そして徐々に彼女に笑顔が見られるようになっていきました。ミリアムは今どうしているでしょうか。彼女が今も平安で健やかに日々を過ごしていることを願ってやみません。

愛知コンサートで希望の出会い！

5月21日に開催された「チャリティーコンサート愛知」（金城学院大学）に来られた佐藤文治・富子さんご夫妻の長男の圭悟くん（1才）は、ヒアさんと同じ先天性の障害をもっておられました。コンサート終了後に佐藤さん家族とヒアさんとお母さんの感動的な出会いが実現しました。「この子は生まれつきの障害で指が4本指です。先月手術したばかりです。ヒアさんの、失ったものを悲しむよりも持てるものに感謝して生きるという言葉に感動しました。ヒアさんがピアノを弾くのを見て、できるんだと励まされました。」（佐藤富子さん）



圭悟！こんにちは、ヒアさんのお母さんと佐藤さん家族

「ルワンダの郊外で」

子どもニュースのまんがを描いているみなみなみさんが今年1月16日から2月8日まで、アフリカ研修ツアーに行って見た事の続きです。

ルワンダ郊外ではあちこちで黄色いポリ缶を運んでいる人をたくさん見かけました。

自転車で荷物を積んで、押して歩いています。自転車で持っている人がまだまだ少ないルワンダ。自転車は重い荷物を運ぶために、とても便利みたいです。

小さな女の子が小さなポリ缶を持っていたり

みんなの行き先には川があり、ポリ缶をもった人たちは水を汲んでいました。



研修チームの私たちが、郊外で泊まったホテルでは…

水道が全く出なかった…

蛇口はあるけど水はでない。

この水さしに入っている水で手や顔を洗いました。

トイレを流すときは、大きなポリ缶を持ち上げて手で水洗。

ホテルの人に風呂に入りたいというと、お湯を持って来てくれました。

お湯です

少ない

お湯があるだけありがたいよ

お湯に少し水をたしてなんとかお湯浴び。

トイレが汚れているお風呂はたぶんもう長い間使われていない

水道水がない人たちにとって、生活で使う水は、わき水や川の水だそうです。とすると、ふだんお料理に使うのもそのお水でしょう。生水や生野菜などは、注意が必要です。

おいしかったルワンダ料理

山羊肉のくし焼き

甘くない揚げバナナ

私たちは水がなくては生きていけません。東日本大震災で避難されている人たちが、最初に必要だったのも水でした。世界では安全な水が手に入らない人がおよそ10億人。これらの人たちは、川や池などから汲んできた水を使うしかなく、そのためにげりをしたりさまざまな病気にかかったりします。ルワンダでも、病気の80%は水が原因といわれています。

元日本国際飢餓対策機構のスタッフで、ルワンダに住む佐々木さんに尋ねました。「私の住んでいる家には水道がありますが、1年に5、6回水が出なくなります。長いときは1週間くらい水が止まります。そんな時は、水がある地域の友だちのところへポリ缶で水をもらいにいきます。水道の水も安全のために沸かして飲んでます。ペットボトルに入った水も売っていますが、500ml入りで300フラン（約50円）。ルワンダでは労働者一日の賃金が1000フラン（約160円）ですから、ペットボトル1本の水はその3分の1の値段です」

清潔な水がどんなに価値があるかわかりますね。ルワンダ政府は2015年までに、みんなが清潔な水を手に入れることができるように努力をしています。



フィリピンの子どもたちと小島スタッフ（バリバラン）

2月24日から3月7日までフィリピンに行ってきました。最初の2日間は王寺ロータリークラブの方々と一緒に、マティクティック村の小学校を訪問。3日目から最終日までは西南学院大学の生徒さん14名と一緒にFHフィリピンとJIFHが協力して支援を続けているバリバランという村に、ワークキャンプの引率者として同行しました。（報告：愛知事務所：小島亮子）

シンプルに誰かのために全力を尽くす！

小さな村の小学校。王寺ロータリークラブの皆様がフィリピンの子どもたちのためにミシンや散髪用品、コンピューターなどを贈って下さり、その歓迎セレモニーに私たちが招待されたのでした。学校に着くと同時に、炎天下の中で待ち構えていた子どもたちによる鼓笛隊に出迎えられ、感動と興奮で胸が高鳴りました。そしてセレモニー会場に入ると、人・人・人。子どもたちはもちろん、その両親、地元の福祉団体やロータリークラブ、そしてなんと村長までもかけつけて私たちを出迎えて下さいました。

「フィリピンの子どもの未来を切り開いて下さって、本当にありがとうございます」とみなさんが感謝の言葉を口にされていました。日本からの贈り物は、子どもたちが

手に職をつけ、収入を得るための大切な品物です。これらの物が貧しい村を変える希望の贈り物となることを心から願いました。

心動かされた瞬間

3日目からのバリバランでは、毎日家の修理をさせて頂きました。みんな泥だらけ、汗だらけになって働きました。決して簡単な作業ではありませんでしたが、ワークの最終日に、家を修理した家族が涙を流して喜んで下さっている姿を見て、私たちの目からも自然と大粒の涙が溢れました。フィリピンと日本。言葉も肌の色

も文化も暮らしも違いますが、全てを超えて一つになった、心動かされる瞬間でした。

頑張る日本の学生にも感動

バリバランの村でもう一つ心動かされる事がありました。それは村の人たちのために全力で働き、全力で子どもたちと遊び、全力で泣いて笑って頑張る西南の学生さんの姿です。日本に戻った今も、彼らは東北の被災地の方々のために何かできないかと、学校に呼び掛けて先日たくさんの物資を仙台に送ってくれました。

フィリピンでも日本でも、「誰かのために一生懸命行動する」というシンプルだけど、とても難しい事を全力で行っている学生さんから多くの事を教えられました。

◀フィリピンそして日本の東北の人たちのためにも応援をしてくれた西南大学の皆さん



物資倉庫からも見える被災者の過酷な日常



（報告：東日本大震災・緊急支援参加ボランティア 大山美礼）
4月25日に仙台に入って三週間。JIFHの物資倉庫（仙台市若林区卸町東）へ被災者の方々が支援物資を求めて、連日足を運んで来られる。ここには全国から届けられたたくさんの物資、野菜、衣類、日用品、消耗品などがある。

一人のお母さんが来られた。この方は、仙台市内に新たにアパートを借りて、家族8人で暮らしているとのこと。こちらから尋ねなくても明るい調子で話されるお母さんに聞いてみた。

「お母さんのご家族が入る予定の避難所はどこだったんですか？」すると、それまでの明るさから一転、目に涙を溜めながら「避難所には犬を飼っているから入れなかったの」とポツリとつぶやかれた。事情を聞いてみると、お母さんと娘さんの家族とで犬を4匹飼っていたのだという。無理やわがままは承知で避難所に行ってみると、担当者から「犬を捨ててから来い！」と一蹴されたそう。家族同然の愛犬を捨てることは出来なかったこの家族にとって、残された選択肢は車の中で過ごすことしかなかった。

そんな中で、せめて食べ物だけでも分けてもらおうと避難所に足を運ぶと、「登録していないから

あげることは出来ない」と担当者からまた追い返されそうになった。しかし、食べ盛りの中学生、小学生の孫も抱える中で簡単に引き下げられない。必死に頼み込んでどうにか貰えたのは、賞味期限切れで固くなったパン一つだった。そんなパンでも孫に食べさせたのだという。

助けを必要とされる方がいる

一緒に来たもう一人の女性は、夜になると徘徊する高齢の母を持つ人だった。そのため周りを気使って、避難所には入らなかった。この方も何も配給がなかったため、食べるにも寝るにも困ったそう。最近になってこの物資倉庫のことを聞き、来たのだという。この方々は、倉庫にある生野菜やパンを見るなり、「やっと孫に柔らかいパンを食べさせてあげられる」と涙ながらに言われた。その言葉には喜びと、そして悲し

みが混じり合っているように思えた。

まだまだ、知らない所で、隠れた所で、助けを必要としておられる方がいる。そう思うと、私の胸が熱くなってくる。人間の尊厳さえも奪われそうになりながら、それでも生きなければならない、そのような現実が私にはわからなかった。

この場所で奇跡的な再会をする人たちもいる。抱き合って出会えたことを喜んでいた。

倉庫に届く物資を仕分ける、その物資を必要な方に届ける。ごく単純な作業に思えるが、日が経つにつれてとても大切で重要な役割であることを実感する。短い出会いであっても、聴くことで被災者が心の荷を少しでも軽くしていただけるなら、それもまた私たちができるもう一つのサポートなのだと思う。



宮崎や愛知の野菜農家から物資倉庫に届けられている新鮮な野菜を車にいっぱい積み込んで、この日は壊滅的な被害の志津川町の避難所へ届けた。こうした野菜は買い物が困難な地域で自宅に避難している方々にも配布を続けている。



仙台市若林区の民生委員の助言で、韓国から大量に届いた新品衣料を避難所に出向いての蜚の市（無料配布）を行う。仮設住宅の入居者などからも喜ばれている。右端に大山ボランティア。